稲荷山古墳の

国宝

金錯銘鉄剣（きんさくめいてっけん）

稲荷山古墳の国宝

金錯銘鉄剣

発掘調査で礫槨・粘土槨から出土した稲荷山古墳の副葬品[1]を昭和53年（1978）に保存処理の作業を行いました。鉄剣のレントゲン写真を撮影すると、剣身の両面に金象嵌[2]の文字が刻まれていることがわかりました。古墳時代の金石文[3]としてはこれまでで最も字数の多い115文字が刻まれ、歴史的価値の高い内容をもっていました。

銘文が発見されたことにより、昭和58年、この剣を含めた稲荷山古墳の礫槨・粘土槨の出土品のすべてが国宝に指定されました。

銘文には、刀を作らせたヲワケという人物の「上祖」（先祖）からの8代にわたる系譜と、ヲワケがヤマト王権の中心である大王家（後世の天皇家の前身）に先祖代々仕え、国を治めるのを助けてきたことを誇るために刀を作らせて、文字を記したことが書かれています。

銘文の読み方には、①「辛亥年」は西暦471年か531年か、②ワカタケル大王は雄略天皇か欽明天皇など、多くの点について論争があります。現在では稲荷山古墳が造られた年代を5世紀後半から末あたりと考えるのが普通なので、①は471年、②は雄略天皇と考える専門家が多いようです。

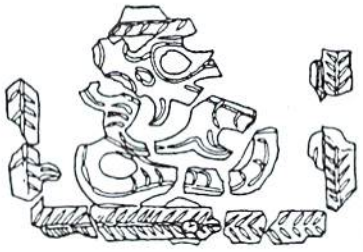
1)副葬品……古墳など墓の中に、遺体に添えて置かれる装身具や武器・宝器などのこと。

2)金象嵌……金属や石などの表面に溝や穴を彫り、その中に別の石や金属を埋め込んで装飾することを象嵌と言います。金を埋め込んだ象嵌が金象嵌です。

3)金石文……石碑や石製品、金属製品などの遺物に刻まれた文字・文章のこと。

4)神仙……古代中国の神話で天と地を司ると考えられている神様のこと。東王父・西王母・伯牙弾琴・黄帝などがある。

5)ヤマト王権……古墳時代の日本列島全体を治めていた豪族の集団のこと。本拠地が奈良盆地から大阪平野の間に設置されていたと考えられているため、奈良盆地全体を総称して呼ぶ地名「やまと」を使って「ヤマト王権」と呼ぶ。この集団のリーダーが「大王」で、奈良時代以降の「天皇」の前身。古くは「大和朝廷」「大和政権」とも呼ばれた。



《銘文の読み下し》

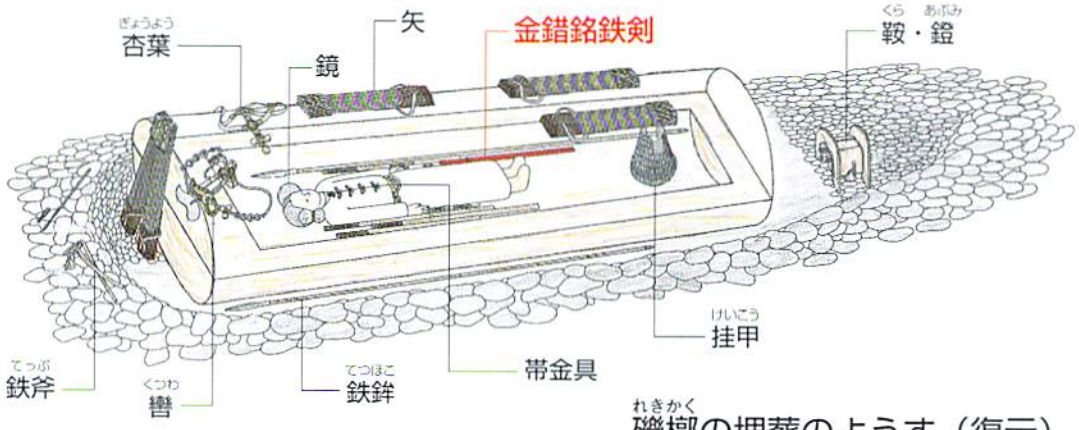
（表面）辛亥の年七月中記す。乎獲居の臣。上祖、名は意富比垝、其の児、多加利の足尼、其の児、名は、弖已加利獲居、其の児、名は多加披次獲居、其の児、名は多沙鬼獲居、其の児、名は半弖比、

（裏面）其の児、名は加差披余、其の児、名は乎獲居の臣。世々杖刀人の首と為り、奉事し来たり今に至る。獲加多支鹵大王の寺、斯鬼の宮に在る時、吾天下を左治し、此の百練の利刀を作らしめ、吾が奉事の根源を記す也。

《銘文を今のことばで書くとこうなります》

（表面）辛亥の年七月中に書きます。（私の名前は）ヲワケの臣。遠い先祖の名前はオホヒコ、その子（の名前）はタカリのスクネ、その子の名前はテヨカリワケ、その子の名前はタカヒシワケ、その子の名前はタサキワケ、その子の名前はハテヒ、

（裏面）その子の名前はカサヒヨ、その子の名前はオワケの臣です。先祖代々杖刀人首（大王の親衛隊長）として今に至るまでお仕えしてきました。ワカタケル大王の朝廷（住まい）が、シキの宮におかれている時に、私は大王が天下を治めるのを助けました。何回もたたいて鍛えあげたよく切れる刀を作らせて、私と一族のこれまでの大王にお仕えした由緒を書き残しておくものです。



礫槨の埋葬のようす（復元）

埼玉県立さきたま史跡の博物館　〒361-0025　行田市大字埼玉4834　TEL 048-559-1111

稲荷山古墳の

国宝

画文帯環状乳神獣鏡

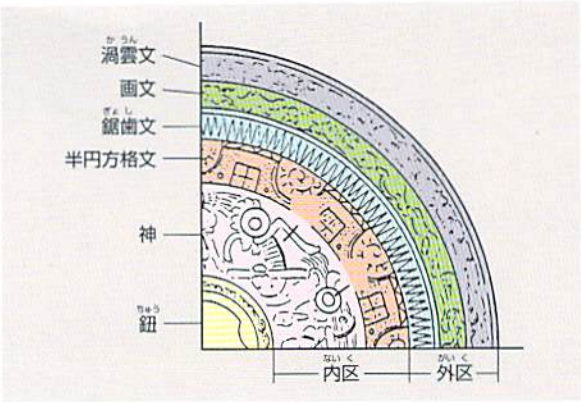
これが実物と
同じ大きさです

画文帯環状乳神獣鏡

礫槨から出土した副葬品の中に鏡一面があります。鏡の文様から「画文帯環状乳神獣鏡」と呼ばれています。鏡の外区(外側)には竜・亀・虎などが表された「画文帯」がめぐり、内区(内側)には8個の丸い突起(環状乳)と竜・虎と神仙[4]が描かれています。獣と神仙を組み合わせた文様を内区に表す鏡を「神獣鏡」と呼びます。

稲荷山と同じ形の鏡が東は群馬県、西は宮崎県まで5か所の古墳から1面ずつ見つかっています。いずれも5世紀後半から6世紀初めころにつくられた古墳です。神獣鏡は弥生時代の終わり(3世紀)から古墳時代の初め(4世紀)に中国でつくられましたが、この鏡群は5世紀に中国で踏み返されたものです。

鏡を出土した古墳の分布は、古墳時代半ば過ぎの地方豪族と中央との関係を示すものです。関東、中部、九州の豪族がヤマト王権[5]の本拠地に出向き、軍人である「杖刀人」や文官である「典曹人」として、大王家に仕えるようになりました。それらの任務に応じて、同じ形の鏡を大王家から分け与えられたと思われます。



鏡の文様の名称

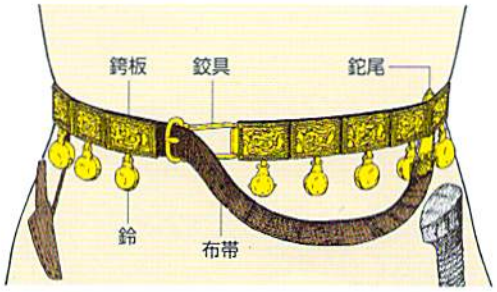
稲荷山古墳と同じ鏡の分布

竜文透彫帯金具

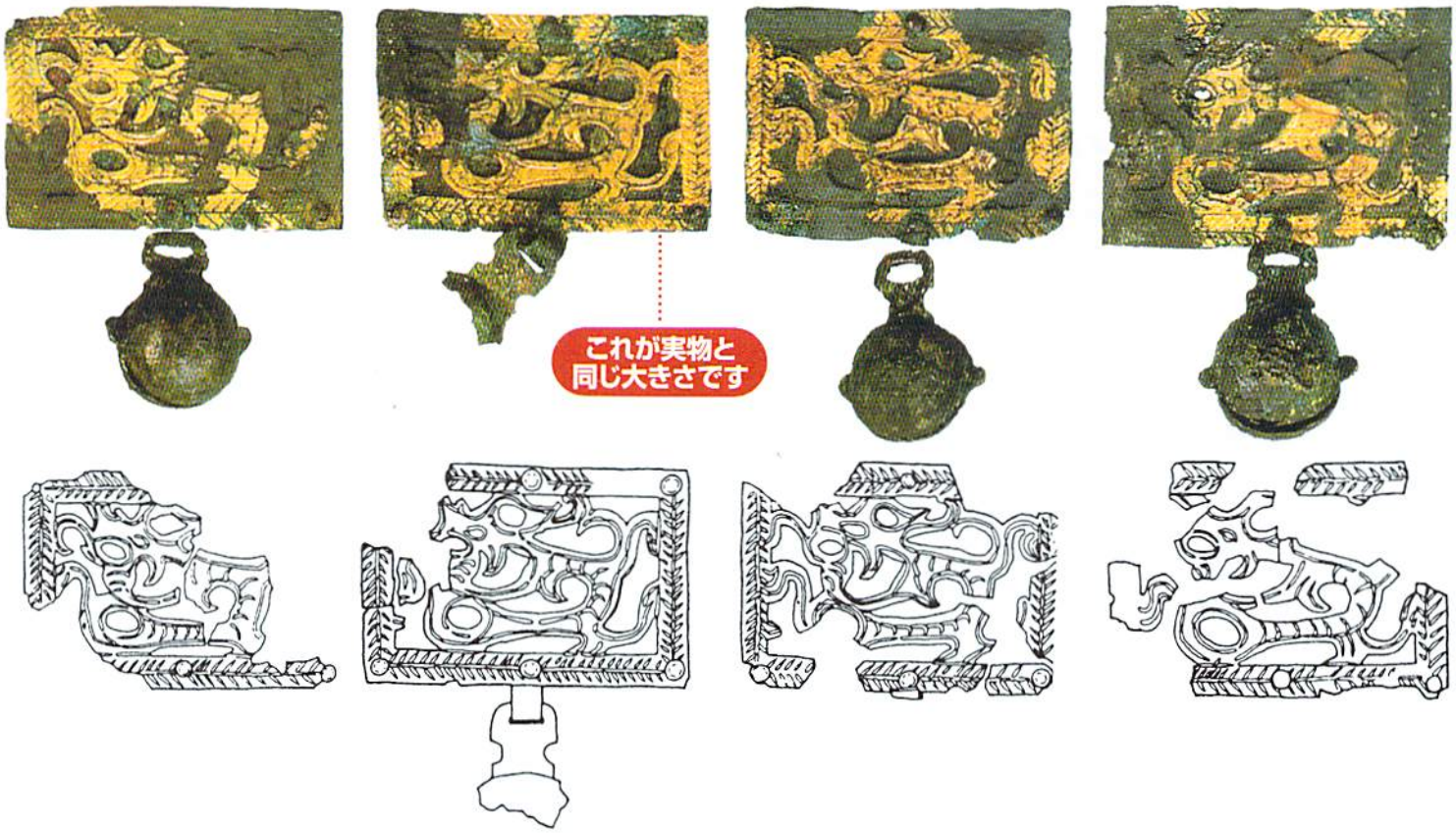
礫槨に葬られた人物は、耳に細い銀のイヤリングをして、首にはヒスイの勾玉を下げ、腰には鈴つきの金銅製の帯金具で飾られて布ベルトをつけていました。

帯金具は留め金具の役目をする「鉸具」 布うえに竜を透彫りした金属板をかぶせた「銙板」、端につける「鉈尾」からなります。鉸具はベルトを留める刺金がなくなっています。銙板は16枚あったと思われ、その数からベルトの長さは120cmくらいになります。竜の透かし彫りは頭を左に向け、左右の前足と後ろ足が描かれています。布ベルトをはさむ表裏2枚の銅板は、四隅など6か所を鋲でとめ、さらに鈴を下げています。

5世紀後半から6世紀初めころの地方豪族は、冠、帯金具、履など金色に輝く装身具を身につけて葬られました。稲荷山と同じころにつくられ、銀象嵌の大刀銘文で知られる熊本県江田船山古墳出土品には、冠、帽子、耳飾り、首飾り、帯金具、履など一通りの装身具がそろっています。こうした装身具類はほとんど中国や朝鮮半島から輸入されたか、工人が渡来してきて製作したものです。



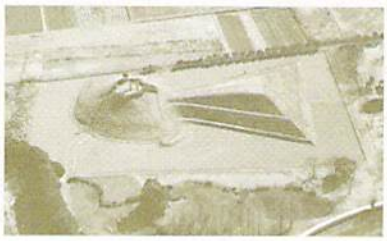
稲荷山古墳の帯の復元



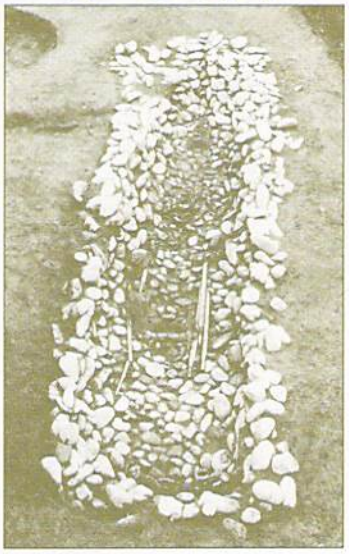
ヲワケ君の古墳探検Ⅱ

―さきたまの国宝（稲荷山古墳）―

登ってみよう　「鉄剣の115文字稲荷山」（さいたま郷土かるた）とよまれる稲荷山古墳。埼玉古墳群の中でも最も古い5世紀後半に造られた古墳です。古墳の頂上には、2つの埋葬施設が復元されています。登って、1500年前のさきたまを想像してみましょう。



世紀の大発見



探してみよう　鉄剣・鏡・勾玉は、どこに埋められていたでしょう。見つけたら○をつけよう。

金錯銘鉄剣

1968年　稲荷山古墳の発掘調査が行われました。2つの埋葬施設のうち、石を張り付けた礫槨から、たくさんの副葬品（死者といっしょに埋めた品物）が出土しました。しかし、この時は、さびた鉄剣に金の文字が書かれているとは、だれも思いませんでした。そして10年後・・・

1978年　奈良県の元興寺文化財研究所で、さびの進行を防ぐため保存処理をしている時、キラッと光るものが見つかり、レントゲン写真を撮ったところ、なんと115文字がうかび上がってきたのです。1500年の時を超えてよみがえった金錯銘鉄剣、まさに「世紀の大発見」でした。そして、5年後・・・

1983年　この金錯銘鉄剣をはじめ、稲荷山古墳から出土した副葬品が国宝に指定されました。

ヲワケ君の自己紹介（115文字のなぞは？）

私が鉄剣の持ち主ヲワケの臣です。それでは、私が刻ませた115文字について説明しましょう。その内容は次のとおりです。

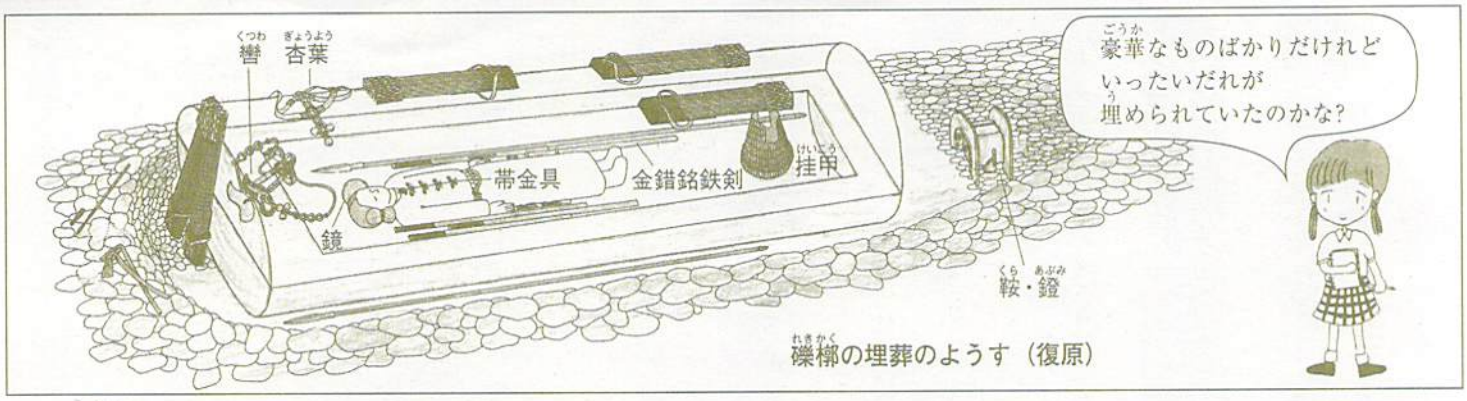
辛亥の年（471年）7月に記す。私はヲワケの臣です。いちばんの祖先はオホヒコ、その子はタカリノスクネ、その子はテヨカリワケ、その子はタカヒシワケ、その子はタサキワケ、その子はハテヒ、その子はカサヒヨ、その子がヲワケの臣です。先祖代々杖刀人首（大王の親衛隊長）として大王に仕え、今に至っている。ワカタケル大王（雄略天皇）がシキの宮にある時、私は大王が天下を治めるのを助けてきた。

そこで、このよくきたえあげた刀をつくらせ、私が大王に仕えてきた由来を記しておく。

考えてみよう　このヲワケの臣はいったいどこのだれでしょうか。さきたまの豪族？それとも大和の豪族？はてさて、どこの人でしょう？

ところで、私が仕えたワカタケル大王の名が、九州の熊本の江田船山古墳から出土した鉄刀にも刻まれていた。つまり、現在の関東地方から九州にかけて，ヤマト王権の影響下にあったといえるでしょう。

（表）　（裏）



礫槨の埋葬のようす（復原）

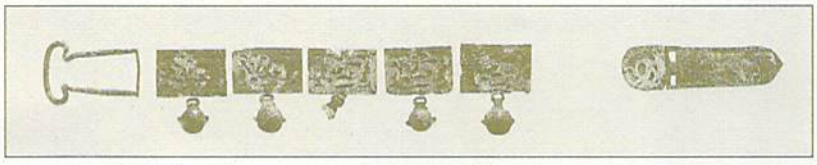
さきたまの国宝を調べよう！

たしかめよう 次の国宝を国宝展示室で見つけたら（　）の中に○をつけよう！

鏡の最も外側に、竜や亀・神仙などを表した「画文帯」がめぐり、その内側に小さい丸い突起（乳）が8個あり、中央に神仙や獣を描いているのでこの名まえがあります。中国で作られたものと考えられています。

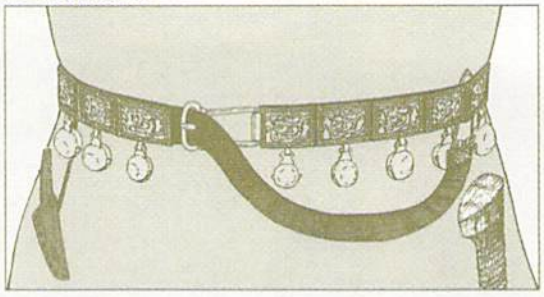
考えよう 右の分布図から、いえることは何でしょう。考えてみよう。

（　）画文帯環状乳神獣鏡



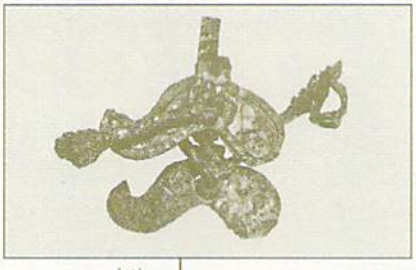
（　）帯金具　錦のベルトに縫い付けて飾りにしたもので銅に金メッキをしています。中国か朝鮮半島から輸入されたものと考えられています。

帯金具復原図



（　）勾玉と銀環　勾玉は、新潟県糸魚川で採れたヒスイで作られたものです。

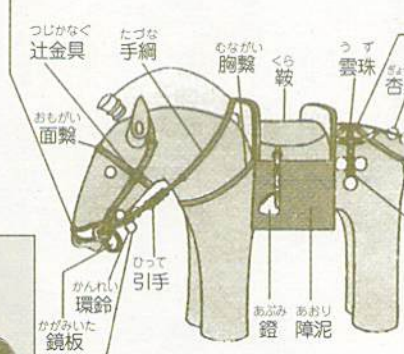
《馬具類》



（　）轡

馬具は馬とともに5世紀になって、中国、朝鮮半島から伝わり、7世紀まで古墳に副葬されました。馬を飾ることが権力を示す手段でもあったのです。

（　）雲珠、辻金具

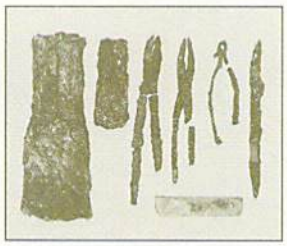


《武器類》

（　）直刀（　）桂甲

鉄製の鉾、矢じり、大刀、剣、桂甲（よろい）などが出土しています。

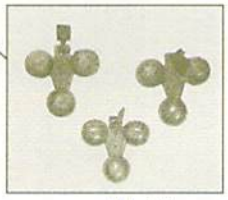
《工具類》



（　）工具類

斧、やっとこ、ピンセット、かんな、砥石などが出土しています。

（　）三環鈴

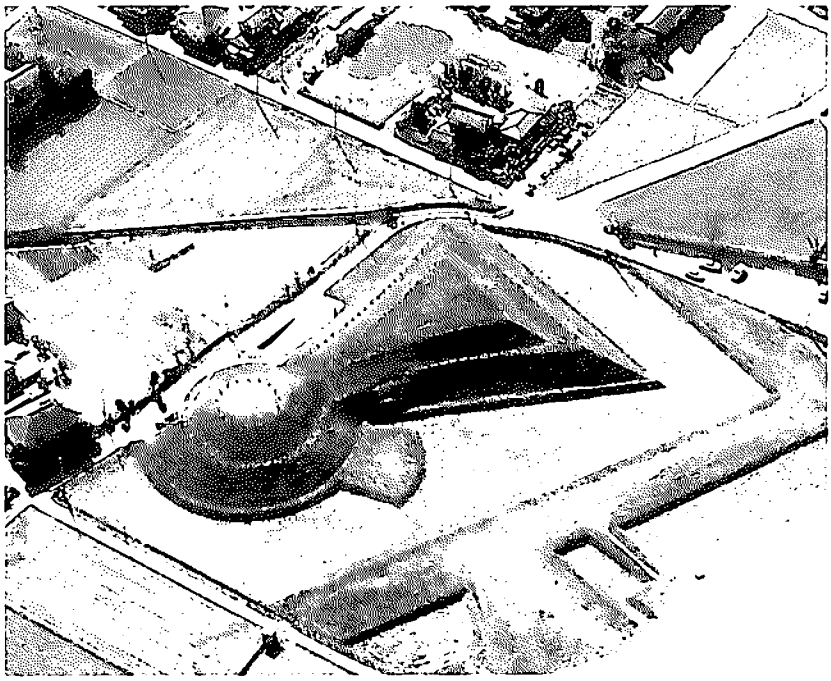


（　）鈴杏葉

将軍山古墳 I

－1400年の時をこえて、今よみがえる！－

埼玉県立さきたま史跡の博物館



将軍山古墳は1894年（明治27年）に地元の人々によって発掘されました。後円部からは横穴式石室が発見され、多くの貴重な遺物が出土しました。

将軍山古墳が築かれた6世紀後半は、大陸や朝鮮半島の新たな技術がもたらされると同時に、大和には仏教も伝わっています。将軍山古墳の石室からは、こうした国際情勢を示す馬具や環頭大刀、銅鋺などと言った朝鮮半島との深いつながりを示す、貴重な副葬品が含まれています。

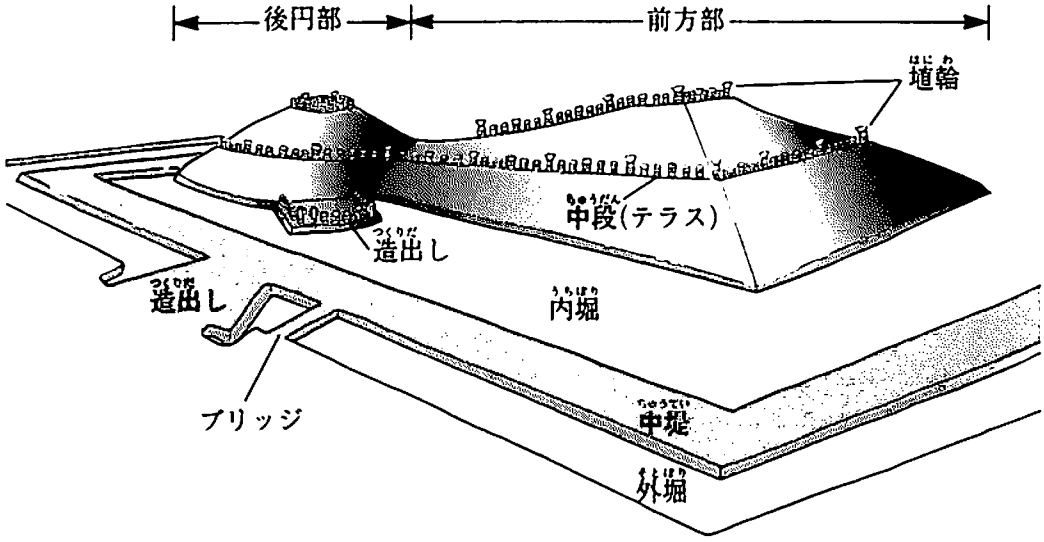
明治年間に発掘され、墳丘の半分が失われてしまった将軍山古墳は、その後、崩壊の危機にさらされていました。その為、古墳の保護と失われた墳丘や周掘、さらには石室内部の様子を復原整備する事業が進められ、1997年に将軍山展示館が開館しました。こうして将軍山古墳は1400年前の姿によみがえったのです。

《古墳の形と大きさ》

墳丘の全長は90m、埼玉古墳群内では４番目、埼玉県内では９番目に大きな前方後円墳です。墳丘は２段築成になっていて、中段（テラス）や頂上には埴輪が並べられていました。 展示館の１階には墳丘の土層パネルがありますが、これを見ると、黄色い土と黒っぽい粘土を交互に突き固めた「版築」という技法で、墳丘が造られたことがわかります。後円部の西側には造出しとよばれる扇形の壇があります。周辺から土器や形象埴輪が多く出土することから、死者に対する「まつり」を行ったところと考えられています。

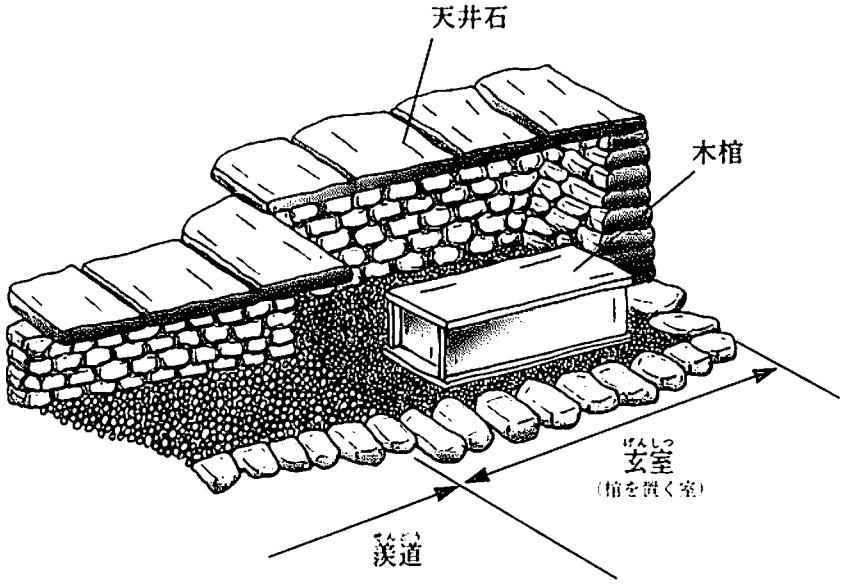
墳丘のまわりには堀が二重に巡っています。埼玉古墳群の前方後円墳は長方形の堀が巡りますが、将軍山古墳も同様と推測されます。

また、内堀と外堀の間の中堤にも、墳丘と同じように造出しがありますが、ここも何かの儀式や「まつり」を行った場所と考えられています。



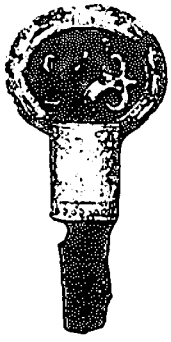
《新しい時代の予感ー横穴式石室》

後円部の中央には、遺体と副葬品が納められていた「横穴式石室」がありました。日本の古い古墳では竪穴を掘って遺体を安置する方法がとられていました。稲荷山古墳の礫槨もその1つです。しかし、4世紀ころ朝鮮半島では横から出入りできる構造の石室が築かれるようになり、それが日本にも伝わってきました。横穴式石室は後から何人もの遺体を納められる合理的なもので、埋葬に対する思想の変化を生み出しながら、急速に広まっていきました。埼玉古墳群の中では、現在のところ、横穴式石室の採用がわかっているのは将軍山古墳だけです。石材は120kmも離れた千葉県富津市の海岸で採取された「房州石」や、荒川上流の緑泥片岩が使われています。

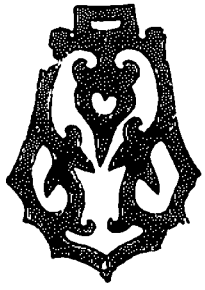


展示館2階には残っていた石室の実物を、一部石材を補充して展示しています。築造当時は、人が立って歩けるくらいの高さまで石組の壁があり、天井が架けられていました。

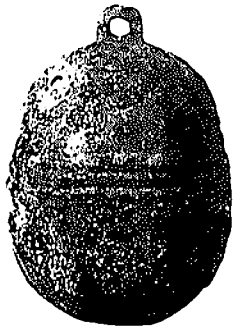
将軍山古墳のおもな副葬品



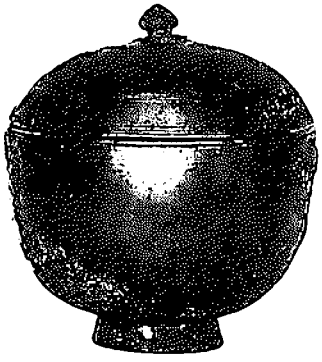
①大刀の柄に付く飾り
(環頭大刀柄頭)



②馬に下げる飾り
(杏葉)

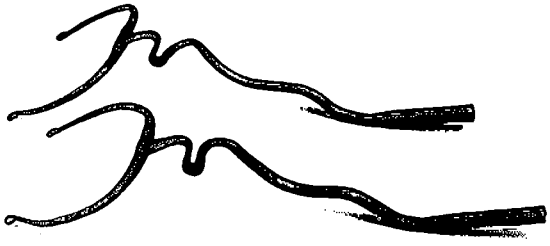


③銅製鈴



④蓋付きの銅鋺

⑤馬の胄



⑥旗ざお金具

《渡来文化の香りただよう副葬品》

将軍山古墳が築かれた6世紀後半、有力者の古墳には渡来文化の影響を受けた華やかな装身具や大刀、馬具などが多く副葬されました。

将軍山古墳からは馬の胄や馬に旗をたてるための「旗ざお金具」など、朝鮮半島から直接輸入されたものも出土しています。1894年の発掘当時の記録がないので、石室内にどのようにならべられていたのかはわかりません。しかし、耳飾りや馬具、甲などが2セットあることから、2人の埋葬が行われたと想像されます。

展示館の石室には、2人目の埋葬状態を再現しています。1人目の副葬品は、すでに石室の隅に片付けられているようすを想定しています。棺の中には装身具を付けた遺体とともに、鏡や大刀が納められています。石室の奥には甲や胄、その手前には金銅製の馬具一式がおかれています。棺の前の銅鋺や土器には死者に捧げた食物などが盛りつけられていたのでしょうか。

①②は東京国立博物館、③④は東京大学総合研究博物館、⑤⑥は埼玉県立さきたま史跡の博物館

埼玉県立さきたま史跡の博物館

将軍山古墳 Ⅱ

－埴輪－

埼玉県立さきたま史跡の博物館

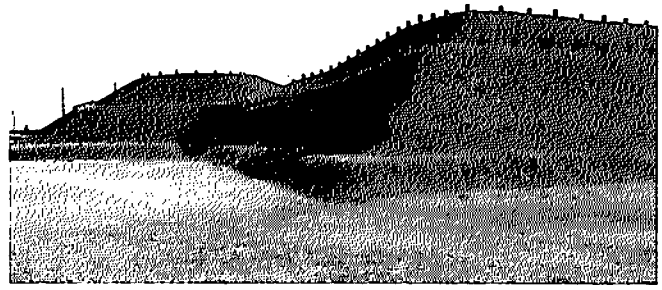
《将軍山古墳の埴輪》

復原された将軍山古墳に、茶色をした筒形の物が立て並べてあるのをご覧になりましたか。これは「埴輪」と呼ばれるもので、粘土を用いて筒形や人物・動物・家などの形をつくって焼いた素焼きの土製品です。「埴」は粘土のことで、「輪」は作る時に輪形にした粘土を円筒状に巻き上げるため、あるいは古墳の上に輪のように立てめぐらせることによるといわれています。

将軍山古墳では、発掘調査の結果、墳頂と中段の平坦面及び堀の中から、円筒埴輪を主体に、朝顔形埴輪、靫（矢を入れて背負う武具）形埴輪、盾形埴輪、大刀形埴輪、家形埴輪、鞆（矢を射るときに左手に付ける道具）形埴輪、男子・女子・盾持ちの人物埴輪、馬形埴輪が出土しました。

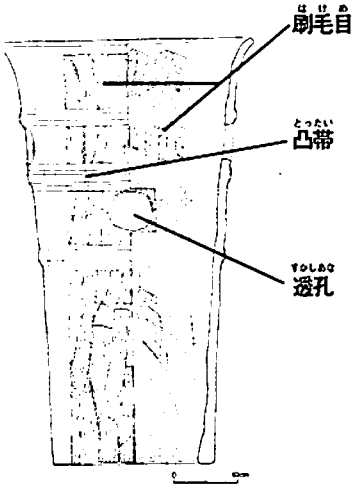
埴輪は長い年月のうちに破損し、多くは斜面から堀の中へ崩れ落ちてしまいますが、将軍山古墳では、前方部の中段に１.７ｍ間隔で破片が集中して出土する部分が発見されました。

今回の復原では、出土埴輪の複製品を作り、調査でわかった間隔を参考にして墳丘に円筒埴輪と朝顔形埴輪を立てめぐらし、築造当時の埴輪列を再現しました。造出しには、周辺から発見された靫形埴輪と盾形埴輪を配置しました。



埴輪が並ぶ将軍山古墳

埴輪の出土状態

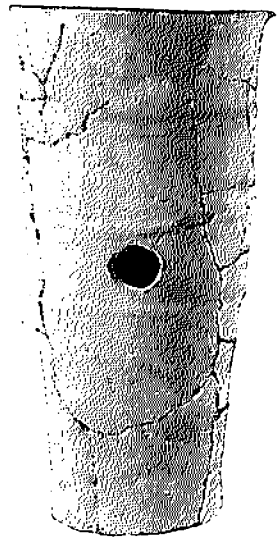


刷毛目　木製の工具を用いて埴輪の表面をなでつけ、厚さを均等にした時にできた痕跡。細かな線状の凹線を特徴とする。

凸帯　埴輪の周囲に巡らされた凸状の粘土紐で、横から見ると台形状に整形されている。箍（たが）とも呼ばれ、通常は間隔を置いて２～５段ほど巡らされる場合が多い。

透孔　基本的には向かい合わせに開けられ、複数の場合は上下の位置が交差する。運ぶ時や並べる時に手や棒を入れて動かし易くする、或いは焼き上げる時の燃焼効率を上げる為などの説があるが、何故、こうした孔を開けたのかは不明。

埴輪の名称



円筒埴輪

朝顔形埴輪

《埴輪の種類》

埴輪の起源は、いまから約１８００年くらい前の西暦２００年頃（弥生時代の終わり頃）、吉備地方（今の岡山県地方）の墳墓に供えられていた「特殊器台形土器」と言われており、それが変化して円筒埴輪になったと考えられています。

また、朝顔形埴輪は壺と円筒埴輪が合体して成立したと考えられています。

埴輪の中で最も多いのは筒型をした円筒埴輪です。これに対して家・人物・動物などの形をした埴輪を形象埴輪と呼び、次のような埴輪があります。

（下線付きは将軍山古墳で発見されている埴輪）

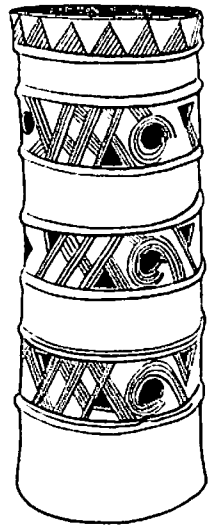
円筒埴輪　<u>円筒</u>、<u>朝顔形円筒</u>

人物埴輪　武人、貴人、農夫、巫女、<u>盾持ち</u>、演奏者、踊る人、相撲取り、鷹匠、馬子、椅子に座る人、子守、<u>男子像</u>、<u>女子像</u>

動物埴輪　<u>馬</u>、犬、水鳥、鶏、鹿、猪、鹿、魚、牛、猿、ムササビ

器財埴輪　<u>盾</u>、<u>大刀</u>、<u>靫</u>、<u>鞆</u>、蓋、船、甲、冑、椅子、高杯、鬘、合子、帽子、矛

家形埴輪　<u>住居</u>、倉庫、舞台



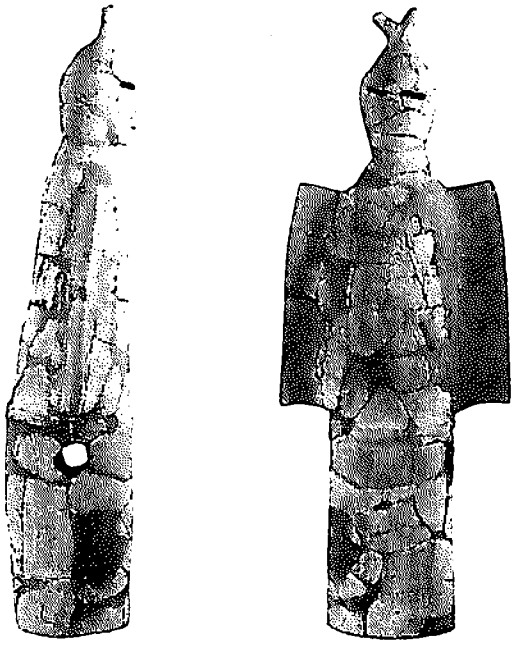
特殊器台形土器

《埴輪を立てる理由》

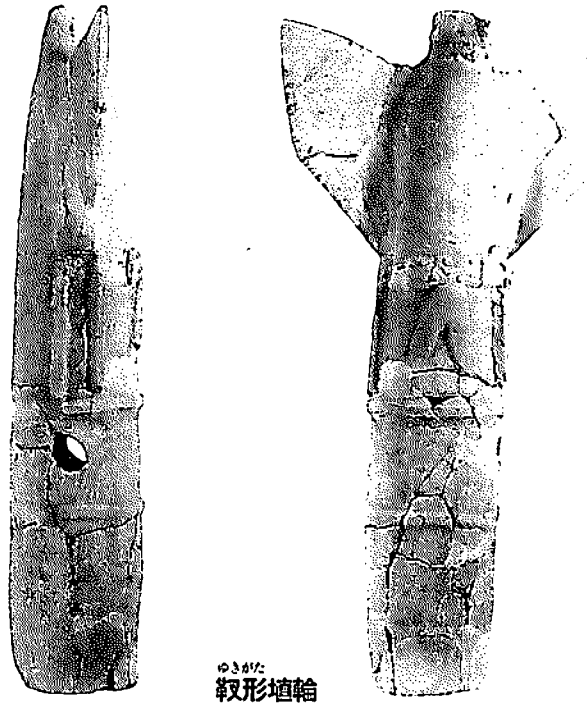
これら埴輪を立てた目的については、これまでに多くの研究がされてきました。以下、主な説を紹介します。①偉い人が死んだときに、いっしょに死ぬ（殉死）かわりに人の形を作った（殉死代用説で「日本書紀」に記されている）。②古墳に盛った土が崩れるのを防ぐ（土留め説）。③古墳を美しく飾る（装飾・荘厳説）。④縦方向の刷毛目と箍は、柴を縄で束ねた状態を表している（柴垣説）。⑤宮殿の垣根と同様に神聖な場所を囲む（玉垣説）。⑥日常使用の器物を供えた（代用供説）などがありました。

埴輪がつくられはじめた頃は、円筒埴輪や器財埴輪が、墳頂部の埋葬施設が置かれた場所を方形に囲むように立てられていることから、遺骸が葬られている大事な場所との境界、聖域を守るという区画・隔絶の表示であったようです。

５世紀になると墳丘以外の造出しや中堤の部分など、人目につくところに人物・動物・器財・家形埴輪が置かれるようになりました。配置の位置等から葬送の儀式や王者の交代の儀式、祭宴のようすを再現しているのではないかと考えられています。埴輪は７世紀の初めになると、前方後円墳の終焉とともに作られなくなりました。



盾持ち人物埴輪



靫形埴輪

将軍山古墳Ⅱ

－埴輪－

埼玉県立さきたま史跡の博物館

《将軍山古墳の埴輪》

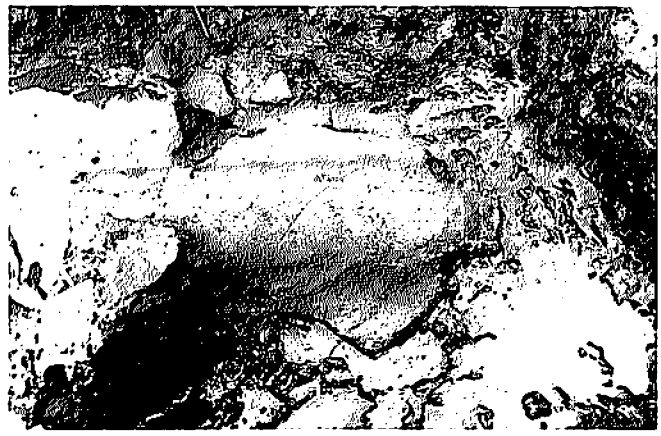
復原された将軍山古墳に、茶色をした筒形の物が立て並べてあるのをご覧になりましたか。これは「埴輪」と呼ばれるもので、粘土を用いて筒形や人物・動物・家などの形をつくって焼いた素焼きの土製品です。「埴」は粘土のことで、「輪」は作る時に輪形にした粘土を円筒状に巻き上げるため、あるいは古墳の上に輪のように立てめぐらせることによるといわれています。

将軍山古墳では、発掘調査の結果、墳頂と中段の平坦面及び堀の中から、円筒埴輪を主体に、朝顔形埴輪、靫（矢を入れて背負う武具）形埴輪、盾形埴輪、大刀形埴輪、家形埴輪、鞆（矢を射るときに左手に付ける道具）形埴輪、男子・女子・盾持ちの人物埴輪、馬形埴輪が出土しました。

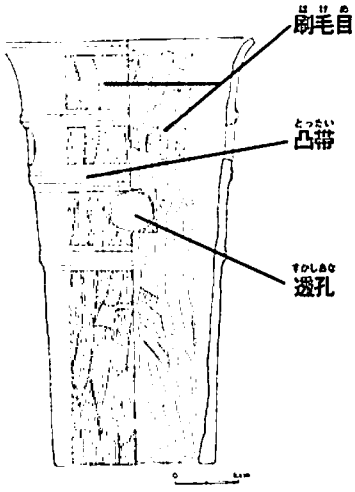
埴輪は長い年月のうちに破損し、多くは斜面から堀の中へ崩れ落ちてしまいますが、将軍山古墳では、前方部の中段に１.７ｍ間隔で破片が集中して出土する部分が発見されました。

今回の復原では、出土埴輪の複製品を作り、調査でわかった間隔を参考にして墳丘に円筒埴輪と朝顔形埴輪を立てめぐらし、築造当時の埴輪列を再現しました。造出しには、周辺から発見された靫形埴輪と盾形埴輪を配置しました。

埴輪が並ぶ将軍山古墳



埴輪の出土状態

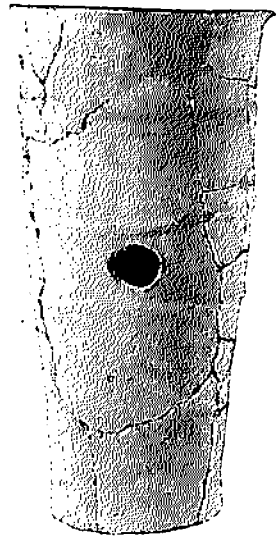


刷毛目　木製の工具を用いて埴輪の表面をなでつけ、厚さを均等にした時にできた痕跡。細かな線状の凹線を特徴とする。

凸帯　埴輪の周囲に巡らされた凸状の粘土紐で、横から見ると台形状に整形されている。箍（たが）とも呼ばれ、通常は間隔を置いて２～５段ほど巡らされる場合が多い。

透孔　基本的には向かい合わせに開けられ、複数の場合は上下の位置が交差する。運ぶ時や並べる時に手や棒を入れて動かし易くする、或いは焼き上げる時の燃焼効率を上げる為などの説があるが、何故、こうした孔を開けたのかは不明。

埴輪の名称



円筒埴輪

朝顔形埴輪

《埴輪の種類》

埴輪の起源は、いまから約１８００年くらい前の西暦２００年頃（弥生時代の終わり頃）、吉備地方（今の岡山県地方）の墳墓に供えられていた「特殊器台形土器」と言われており、それが変化して円筒埴輪になったと考えられています。

また、朝顔形埴輪は壺と円筒埴輪が合体して成立したと考えられています。

埴輪の中で最も多いのは筒型をした円筒埴輪です。これに対して家・人物・動物などの形をした埴輪を形象埴輪と呼び、次のような埴輪があります。

（下線付きは将軍山古墳で発見されている埴輪）

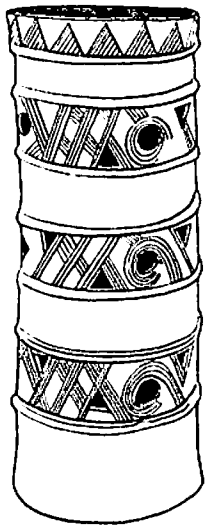
円筒埴輪　<u>円筒</u>、<u>朝顔形円筒</u>

人物埴輪　武人、貫人、農夫、巫女、<u>盾持ち</u>、演奏者、踊る人、相撲取り、鷹匠、馬子、椅子に座る人、子守、<u>男子像</u>、<u>女子像</u>

動物埴輪　馬、犬、水鳥、鶏、鷹、猪、鹿、魚、牛、猿、ムササビ

器財埴輪　<u>盾</u>、<u>大刀</u>、<u>靫</u>、<u>鞆</u>、蓋、船、甲、冑、椅子、高杯、鬲、合子、帽子、矛

家形埴輪　<u>住居</u>、倉庫、舞台



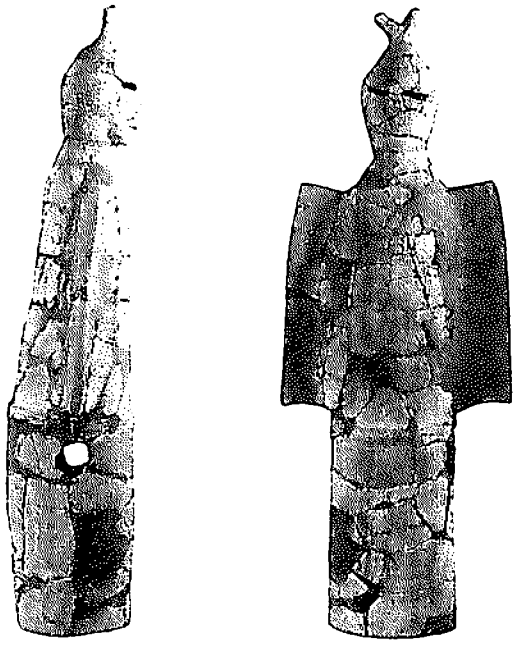
特殊器台形土器

《埴輪を立てる理由》

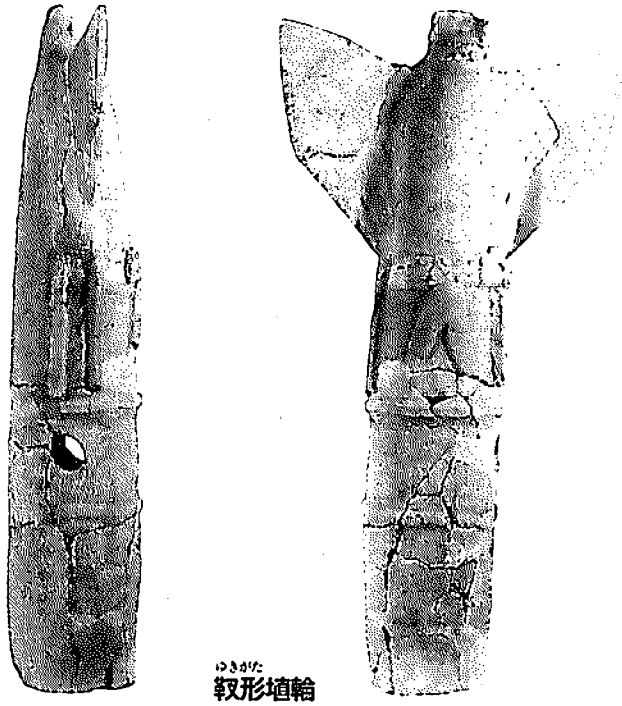
これら埴輪を立てた目的については、これまでに多くの研究がされてきました。以下、主な説を紹介します。①偉い人が死んだときに、いっしょに死ぬ（殉死）かわりに人の形を作った（殉死代用説で「日本書紀」に記されている）。②古墳に盛った土が崩れるのを防ぐ（土留め説）。③古墳を美しく飾る（装飾・荘厳説）。④縦方向の刷毛目と箍は、柴を縄で束ねた状態を表している（柴垣説）。⑤宮殿の垣根と同様に神聖な場所を囲む（玉垣説）。⑥日常使用の器物を供えた（代用供説）などがありました。

埴輪がつくられはじめた頃は、円筒埴輪や器財埴輪が、墳頂部の埋葬施設が置かれた場所を方形に囲むように立てられていることから、遺骸が葬られている大事な場所との境界、聖域を守るという区画・隔絶の表示であったようです。

５世紀になると墳丘以外の造出しや中堤の部分など、人目につくところに人物・動物・器財・家形埴輪が置かれるようになりました。配置の位置等から葬送の儀式や王者の交代の儀式、祭宴のようすを再現しているのではないかと考えられています。埴輪は７世紀の初めになると、前方後円墳の終焉とともに作られなくなりました。

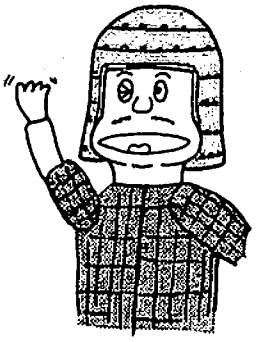


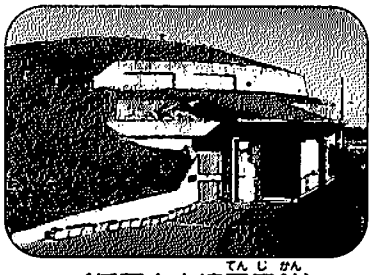
盾持ち人物埴輪



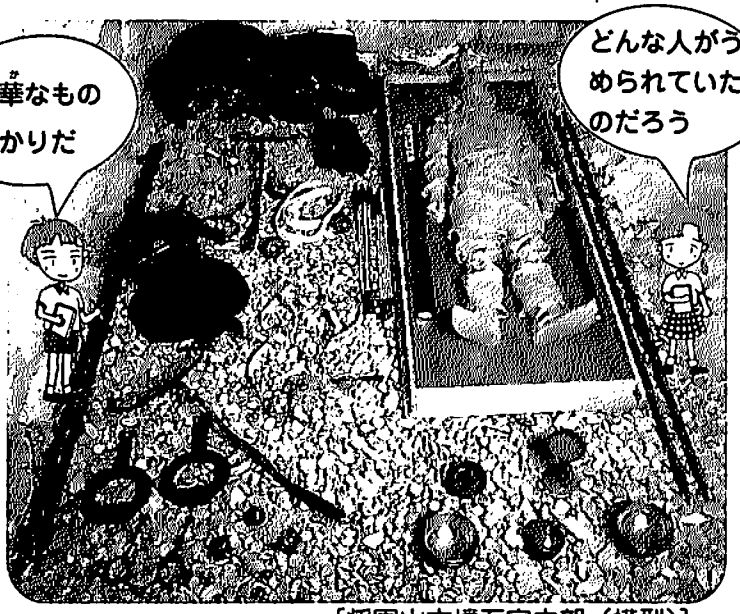
靫形埴輪

将軍山古墳展示館をのぞいてみよう！





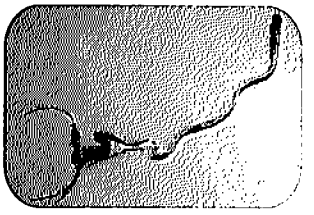
（将軍山古墳展示館）

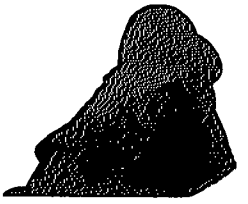


［将軍山古墳石室内部（模型）］

考えようⅠ

次の馬具は何に使ったのでしょう？





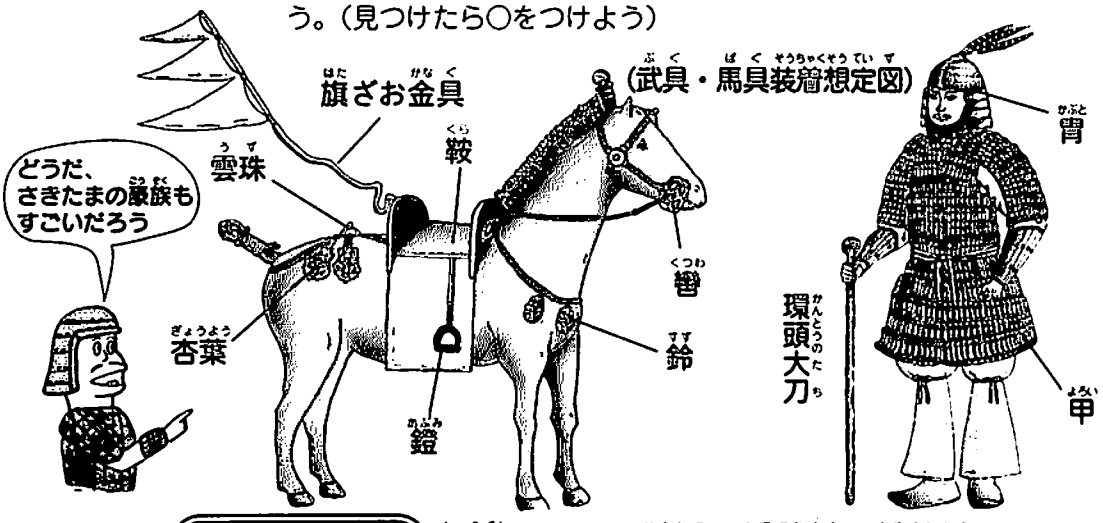
副葬品は外国製？

－将軍山古墳の主は国際人－

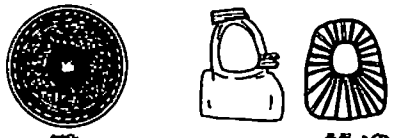
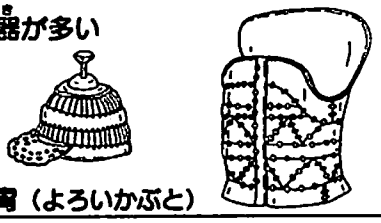
死者といっしょに古墳の中に埋められた品物を副葬品といいます。将軍山古墳からは、上の写真にあるようなすぐれた品物がたくさん出土しました。中には、日本でまだ2つしか発見されていない馬冑（馬の冑）や関東ではきわめて少ない旗ざお金具もあります。これらは、ほとんどが朝鮮半島からの輸入品であったといわれています。埼玉古墳群に葬られた豪族たちは、朝鮮半島と交流のあった国際人だったのかもしれませんね。

みつけよう

下のイラストの人や馬が身に付けている武具や馬具を石室の中から見つけよう。（見つけたら○をつけよう）

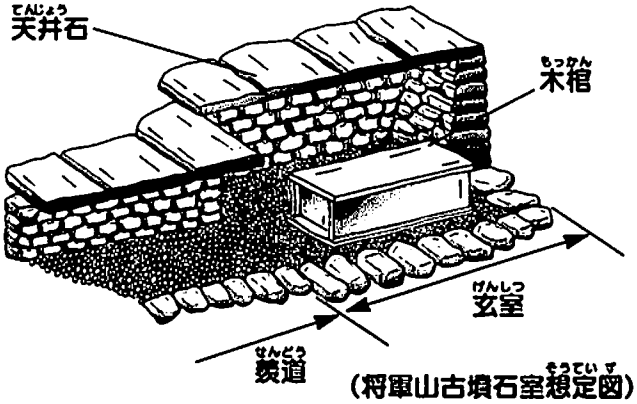


《副葬品の移り変わり》

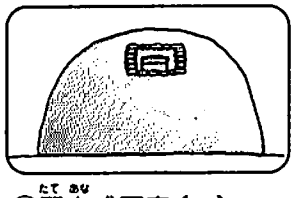
3世紀後半～4世紀	お祭りに使用する品物が多い  鏡　石で作った装飾品
5世紀	武器が多い  甲冑（よろいかぶと）
6世紀～7世紀	中国や朝鮮の影響を受けたすぐれた品物が多い 耳かざり　馬のかざり　かざり大刀

考えようⅡ　将軍山古墳の石室は竪穴式？横穴式？

古墳の中心には古墳の主を納める石室があります。石室には①竪穴式のものと②横穴式のものがあります（下の図）。さて、将軍山古墳の石室はどちらでしょう。（○をつけよう）

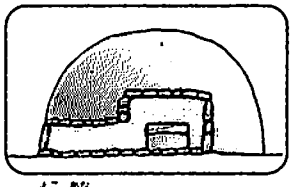


（将軍山古墳石室想定図）



①竪穴式石室（　）

天井石でふたをし、土をかぶせると二度とあけられない。



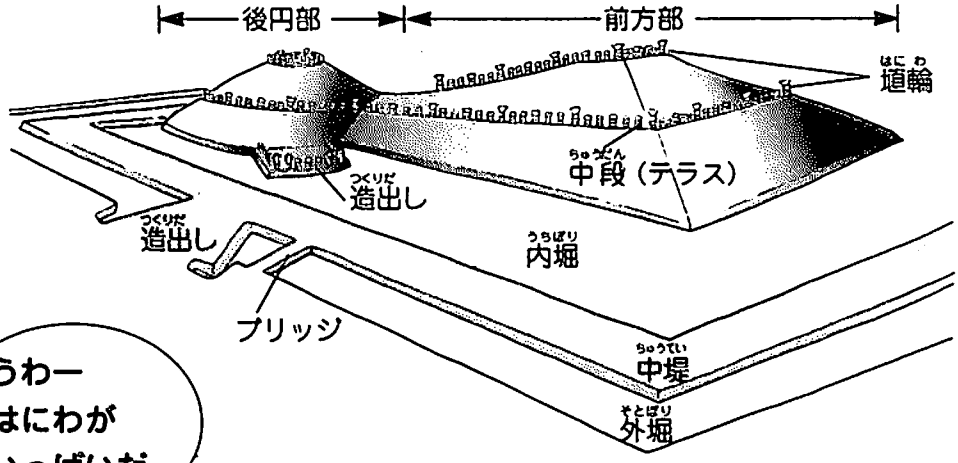
②横穴式石室（　）

横穴入り口のふた石をとると、中に入ることができる。そのため、棺を後から追加埋葬できる。

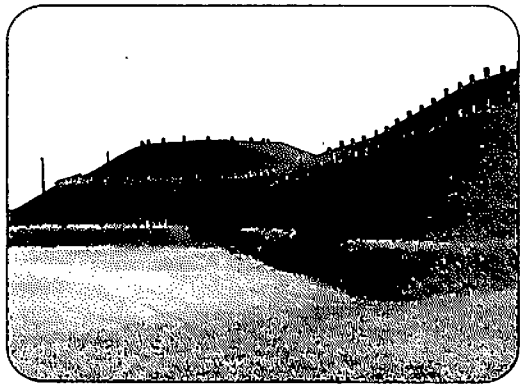
ヲワケ君の古墳探検Ⅰ

ーよみがえった将軍山古墳ー

たしかめよう 復原された将軍山古墳をみて、古墳の部分の呼び方をたしかめよう。（自分の目でたしかめたら○をつけよう）



将軍山古墳は全長90mで、埼玉古墳群の中では4番目に大きい［　　］（古墳の形）です。埼玉古墳群の多くの古墳と同様に二重の堀をもち、くびれ部と中堤に葬式の儀式やまつりが行われたと考えられる造出しがあります。6世紀後半につくられた古墳と考えられています。



（復原された将軍山古墳）

《古墳の形あれこれ》

「円墳」「方墳」「前方後円墳」「前方後方墳」が代表的です。日本全国に古墳は全部で20万基もあるといわれていますが、そのほとんどが円墳です。しかし、大王や有力な豪族の墓の多くは前方後円墳です。前方後円墳に埋められた人は、大王と深い関係をもっていたのでしょう。

埴輪って何？

将軍山古墳には168本の埴輪が並べられている。埴輪とは、粘土を焼いて作ったもので、古墳の頂上や周りに並べられました。土管のような円筒埴輪は、古墳を神聖な場所として外の世界から区別して、古墳を守る役割をもっていたようです。また、人物や動物、家などをかたどった形象埴輪からは、当時の人々の生活のようすがわかり、とてもおもしろいものです。

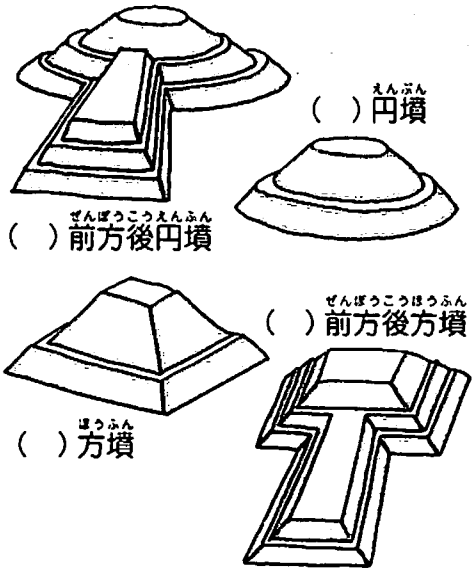
（盾を持つ人物埴輪）

かいてみよう

将軍山古墳に並べられている埴輪（模型）をスケッチしてみよう！

調べよう

埼玉古墳群にはどんな形の古墳がある？（現在あるものに○をつけよう）



【瓦塚古墳から出土した形象埴輪】

人物埴輪（男子）

あぐらをかいた膝に琴をのせている男子の埴輪です。右手にはバチと思われる道具を持っており、指の形などから琴を弾いている様子を表しているものと考えられています。稲荷山古墳からも琴と思われる埴輪が見つかっています。頭の両脇に細長い棒状のものが付いていますが、これは「美豆良」といって古墳時代の男性の一般的な髪形です。

人物埴輪（女子）

両手を前にさしだし、耳には耳環と呼ばれるイヤリングをしています。頭の上に四角い板状のものがついていますが、これを「島田髷」と呼んでいます。「島田髷」とは江戸時代の女性髪形のひとつで、古墳時代にも同じようなヘアースタイルをしていたことがわかります。このように人物埴輪からは性別・服装・身分などが分かるため、古墳時代当時の生活を知る上で貴重な資料なのです。

想像してみよう　人物埴輪をよく見て、その人が何をしているのかを想像してみよう。

犬形埴輪

耳と足の一部しか見つかっていないため、おおよその形を復原してあります。耳・しっぽの形から犬の埴輪と考えられます。動物の埴輪には、猪、鹿、馬、猿、鶏、鷹、ムササビ、魚などの種類があります。

水鳥形埴輪

右は高さ約82cmの水鳥の埴輪で、頭と足は石膏で復原してあります。左は高さ約59cmの白色の鳥形埴輪で、白鳥であると思われます。古墳時代、白鳥などの水鳥は、死者の魂を運ぶ動物と考えられていました。

家形埴輪

８本の丸い柱で屋根を支えている珍しい形の埴輪です。この家形埴輪は、壁がないことから住まいではなく、歌や踊りを行った舞台ではないかと考えられています。また、寄棟造りといわれる屋根の形をした家形埴輪も見つかっていて、こちらは豪族の住まいではないかと思われます。

盾形埴輪

古墳時代に使われていた武具の一つです。瓦塚古墳からは、盾を持った男性の埴輪が見つかっています。この盾を持った人物埴輪は、大切な古墳を守る番人のような意味が込められていたと思われます。その他の武具の埴輪には、大刀、弓、甲、冑などがあります。

《瓦塚古墳に関するまとめ》

古墳の形を何という？［ A ］（ほかにどんな形の古墳があるのか調べてみよう）
古墳の中でまつりを行ったとされる場所は？［ B ］（古墳の他の部分についても調べてみよう）
埴輪の種類には大きく２つのものがあります。それは何と何？［ C ］埴輪と［ D ］埴輪
［ D ］の埴輪にはどんな種類のものがありますか？［ E ］［ F ］［ G ］
古墳時代の男性の一般的な髪形を何と言いますか？［ H ］（女性の髪形についても調べてみよう）

埼玉県立さきたま史跡の博物館

ヨワケ君の古墳探検Ⅲ
ー瓦塚古墳は埴輪の宝庫ー

歩いてみよう

博物館前の移築民家の裏側に見えるのが瓦塚古墳です。今から約1,500年前の6世紀前半に造られた前方後円墳です。もとの姿に復原するための発掘調査を行った結果、全長73mで二重の堀がめぐる前方後円墳であることがわかりました。前方部の西側には、まつり（儀式）を行った場所といわれる造出しがありました。また、造出しの西側には外堀の一部を堀り残したブリッジといわれる通路も見つかりました。なお、復原では、水はけをよくするために、堀には砂利を敷き、中堤には芝を張りました。古墳の周りを歩いて瓦塚古墳の大きさ・形を体感してみましょう。

《埴輪の種類》

埴輪には、円筒埴輪と形象埴輪の二つの種類があります。円筒埴輪には、下の絵のように円筒埴輪と朝顔形埴輪があります。形象埴輪には、人物・動物・家などの形があります。

円筒埴輪

円筒埴輪
（将軍山古墳）

朝顔形埴輪
（稲荷山古墳）

形象埴輪

人物埴輪
（瓦塚古墳）

人物埴輪
（瓦塚古墳）

人物埴輪
（稲荷山古墳）

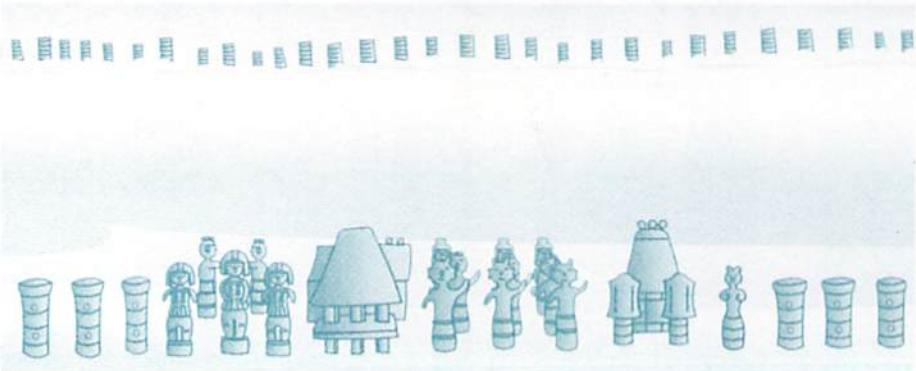
人物埴輪
（梅塚古墳）

動物埴輪・馬
（酒巻 14 号墳）

家形埴輪
（瓦塚古墳）

《埴輪はどのように使われたのか？》

埴輪は、古墳の墳丘（土が盛られた部分）や堤の部分などに並べられていました。それらのほとんどは円筒埴輪です。造出しやブリッジの近くには、いろいろな種類の形象埴輪が並べられることが多いようです。それらの形象埴輪は、当時の生活やまつり（儀式）の場面などを再現しているものと考えられています。将軍山古墳では古墳が造られた当時の埴輪列を復原してありますので、埴輪がどのように使われたのか観察してみましょう。



答え　A 前方後円墳、B 造出し、C 円筒、D 形象、E～G 人物（男子・女子）、動物（馬、水鳥ほか）、武器、家々、H 美豆良